

# 週

中から体の調子が悪く、週末になっても治らず、今週は競馬を休もうかと思った。しかし私、本誌が

創刊した1993年秋から1号も休まず、この連載コラムを書いてきたのだ。ここでその記録が途絶えてしまうのも寂しい。そこで、日曜の朝、ふらふらと駅前まで新聞を買いにいき、一応検討を開始した。ところが文字が頭に入っていない。しかも新聞を見ているうちに睡魔が襲ってくる。無理だよなあ、こんな日に競馬をやるのは。そのうちにレースが始まったが、中山2R（2歳未勝利の芝1200メートル）で人気の戸崎が、いや違う、戸崎の乗る⑤パルフェメが楽勝の逃げ切りかと思ったら、アツという間に捕まって、後続馬群にのみ込まれていく。競馬はホント、むずかしい。どのみち最近の私は、午前中のレースは買わないのだが（昔は朝からたつぷりと馬券を買っていた。面白かったなあ、あのころ）、競馬には流れというものがあるから、午前中のレースは必ずチェックしている。朝から堅い決着が続いているのか、それとも人気馬が飛んで荒れまくっているのか。それはとても重要だ。続く中山3R（2歳未勝利のダート1800メートル）では、単勝1.4倍の④エコロドゥネス（鞍上はマーカンド）が、逃げた⑨サンライズパスカルをなかなか捕らえきれず、ええい、かわせないのかよ、早く差してしまえ、と馬券を1円も買っていない私がなんでも力を入れるのかまったくわからないが、テレビに向かって思わず、「差せ」と言ってしまうのである。ところがその④エコロドゥネス、先頭に躍り出るところか、そこでピタッととまり、なんと後続馬群にのみ込まれていくから呆然。ホントかよ。もしも私が単勝1

# 馬券の真実

連載 1504



## 藤代三郎

1946年東京生まれ。明治大学文学部卒。ミステリーと野球とギャンブルを愛する。著書に、トウショウボーイ、テンポイント、グリーンガラスの3強時代を描いたギャンブル読み物『戒厳令下のチンチロリン』（角川文庫）、『一人が三人』（晶文社）、『外れ馬券を撃ち破れ』、『外れ馬券に約束を』、『外れ馬券にさよならを』、『外れ馬券に帆を上げて』（メディアム出版社）。

今回しみじみと感じたのは、健康がいちばんということだ。普段は馬券が当たらないことに文句を言ったりしているが、毎週元気で馬券を買っている日々こそ、極上の日々なのである。



日曜の中山3Rは単勝1.4倍の④が逃げた⑨をなかなか捕らえきれず、先頭に躍り出るところか後続馬群にのみ込まれて呆然。馬券は1円も買っていないかったが、もしもこの馬にしこたま勝負していたら、猛烈に不機嫌になったに違いない

40円のこの馬にしこたま勝負していたら、猛烈に不機嫌になったに違いない。そのあとは何があったのか、よく覚えていない。気がついたら、香港ヴァーズが始まっていた。この日は香港のシャティン競馬場で、香港ヴァーズ、香港スプリント、香港マイル、香港カップが行われる「香港国際競走」の日で（シャティン競馬場が洋芝仕様であることを見今初めて知った）、その香港ヴァーズの出走が日本時間の15時10分。だから、その香港ヴァーズをウインマリリンが勝つても余韻に浸っている時間がない。すぐに阪神ジュベナイルFのパドック中継が始まり、それが終わるとすぐ、中山11RカペラSの実況が始まるのである。私は、阪神ジュベナイルFと中山11RカペラSの馬券を昼前に買い、外国競馬は1円も買っていないので、全然忙しくないが大変だったろう。ところで私、香港競馬には

1度だけ行ったことがある。30年ほど前だったと思うが、シャティン競馬場が工事中でたかたか、ハッピーバレー競馬場にいった。ある雑誌がアジアのギャンブル特集の別冊をつくり、香港競馬パートのゲストとして私に声がかかったのである。そういう企画がすすんだり通ったのだから、いい時代だった。私はただ競馬場で馬券を買って遊んでいけばいい、という夢のような仕事だった。しかも競馬のパートが終わればお役御免なのだが、マカオのドッグレースの取材にも遊び半分で行くとき（ドッグレースに予想紙があることをそのとき知る。なんと「追い込み」なんて犬がいるのだ）、それが終わると次はカジノの取材。マカオのホテルリスボアは、階によってレートが異なり、最上階のレートはいくらだったかなあ。私たちは取材ということでそのフロアにも入れてもらったが、大小のテーブルを見学するだけで、実際には遊んでいない。世

はマカオで4人、火鍋を囲んでにぎやかで楽しかったのだが、香港最終日の夜はとても静かな夕食だった。香港国際競走を見ているうちに、遠い昔を思い出してしまったが、あときの編集者とカメラマンとコディネーターは、元気でやっているだろうか。4人で香港マカオのギャンブル事情を取材した数日間を覚えているだろうか。年を取ると、しょっちゅう昔のことを思い出す。楽しいことはすべて過去にあるのだ。今回しみじみと感じたのは、健康がいちばんということだ。当たりまえのことだが、普段はそのことを忘れていた。健康であれば、それだけでいいのだ。それ以上はなにも求めない。普段は馬券が当たらないことに文句を言ったりしているが、とんでもないことである。毎週元気で馬券を買っている日々こそ、極上の日々なのである。ふらふらになりながらも、そう思うのである。

界の金持ちは、こういうさりげない竹まきなんだと感心したことを覚えている。もう時効であろうから書いてしまおうけれど、最終日の夜、現地のコディネーターとカメラマンの二人が、編集者ともめて対立。なんで彼らが喧嘩したのか、その原因は聞かなかった。コディネーターとカメラマンの二人がホテルに戻ってしまったので、私は編集者と二人で食事することになった。その前日